

平成 30 年 6 月 14 日現在

機関番号：12102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2017

課題番号：16K16734

研究課題名(和文) 戦後ドイツにおける日本美術研究の復興

研究課題名(英文) Japanese Art History in Germany after the WWII

研究代表者

江口 みなみ (Eguchi, Minami)

筑波大学・芸術系・研究員

研究者番号：90753210

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：ナチス政権が崩壊し終戦を迎えた時、ドイツに住む人々の生活は完全に破壊されていた。人々に課されたゼロからの復興の出発点は、しばしば「零時Stunde Null」と呼ばれるが、日本美術の研究拠点もまたゼロからの復興を強いられた。本研究課題では、終戦直後のドイツにおける日本美術研究の状況と、その復興について調査・検討を行った。事例研究として、日本美術史家ディートリヒ・ゼッケルの戦後の活動および西独で1950年代初頭に開催された日本美術の展覧会をとりあげ、さらにドイツ人芸術家ハンス・リヒターと洋画家長谷川三郎の米国における交流について、戦後の日独美術交流が断絶した状況下で生じた事例として分析した。

研究成果の概要(英文)：When the Nazi regime collapsed and the World War II finally ended in May 1945, the life of people in Germany was completely devastated. It was the time to begin the reconstruction from zero, so-called "Stunde Null (Zero Hour)", and the research base for Japanese art history was no exception. This project examined the condition of Japanese art history in Germany in the immediate post-war period and the course of its recovery. As examples, I took two cases: the activity of Japanese art historian Dietrich Seckel after the war, and the art exhibitions on Japanese art held in West Germany in the early 1950s. Additionally, I analyzed the personal exchange between German artist Hans Richter and Japanese oil painter Hasegawa Saburo in the US, as a case which happened under the severance of artistic relation between Germany and Japan.

研究分野：美術史

キーワード：日独美術交流 戦後美術史研究 ドイツにおける日本美術

1. 研究開始当初の背景

(1) 戦後 70 年を迎え、ドイツでは秘匿資料の閲覧が解禁されるなど、敗戦前後の混乱期を学術的に再考する気運が顕著になっている。美術史分野においても、美術コレクションの離散や美術館の破壊を分析的にとらえる視点が提示されている。こうした研究動向は、敗戦という非常事態を忘れ去るべき過去とするのではなく、美術と政治の関係を再認識する契機と捉える姿勢の頭れと言えらる。また日本においても、桑原規子らの研究成果が代表するように、戦後の GHQ による占領政策と美術界の状況を分析し戦後社会の荒廃から復興への過程における美術環境の変化を捉え直そうとする動向がある。

(2) 筆者は、戦前および戦中期における日本美術の展示空間と国家表象との関係性を軸に、国内外に出現した常設・仮設の「日本美術のための場」について考察を進めてきた。とくに日本とドイツでは、そうした場が 30 年代後半に政治的影響を強く受けた結果、敗戦前後に破壊や閉鎖へと追い込まれた事実を確認したが、その後の動向については看過されていると感じた。60 年代以降日独両国では、美術をめぐる環境が美術館設立等の計画的な整備へと重心が移行したため、それ以前の仮設的な機構は「一時的な処置」として等閑視されたきらいがある。

(3) 筆者は、関東大震災後の未曾有の混乱と美術のあり方を視覚文化の視点から考察した Gennifer Weisenfeld, *Imaging Disaster*, 2012 など、物質的な大量破壊から生まれた造形や思想について論じる研究に触れ、機能不全の状況も含めて戦後の「日本美術のための場」を精査する本研究の着想を得た。

2. 研究の目的

(1) 本研究では、ドイツにおける第二次大戦後の日本美術研究について、何が失われ、どのように復興したのかを明らかにすることを目的とする。

(2) 具体的には、1945 年から 1960 年までの期間を設定し、①ドイツにおける日本美術コレクションの状況、②ドイツで開催された日本美術展覧会、③ドイツの日本美術研究者の研究活動という三つの視点から考察する。同時期にドイツは、東西ドイツの分割およびナチ的な思想を社会的に排除する「非ナチ化 Entnazifizierung」を経験しており、美術品の多くが押収され国外へ流出したほか、美術館等の文化事業も大規模な変革やこれにともなう暫定的処置を迫られた。本研究は、このような状況下で戦後初期の復興事業が実現した経緯や政治的背景について分析し、戦中期に日独美術交流が「リセット」された状況の実態を把握する。

3. 研究の方法

(1) ドイツ国内に残る公的記録資料、展覧会図録や美術雑誌、学術雑誌等の一次資料を精査する。ドイツにおける日本美術コレクションの事例として、ベルリンの東アジア美術コレクションが受けた戦争被害および、戦後の状況を調査する。また美術展の事例として、西ドイツにおける日本美術展の開催状況を把握する。研究者の事例として、学芸員ライデマイスターおよび日本美術史研究者のゼッケルの戦前から戦後にかけての活動について調査する。

(2) 日独美術交流が断絶していた時期に米国において築かれた芸術家の交友関係、とりわけ長谷川三郎とハンス・リヒターの交流について、米国および国内のアーカイブで調査を行った。いずれの調査結果も国際会議における口頭発表のかたちで公表した。

4. 研究成果

(1) 学芸員ライデマイスターに関する調査においては、そのキャリアにおける戦中および戦後のドラマティックな変化について日本国内ではほとんど言及されてこなかったため、筆者の研究成果は今後の美術館史研究にも役立つと思われる。ただし、当初予期していなかったことだが、2017 年夏にドイツにおいてライデマイスターのモノグラフ *Leopold Reidemeister: Ein Deutscher Museumsman 1900-1987* が刊行された。同書は筆者の調査と重複する部分も多いが、筆者の調査では、他の学芸員との比較により東西ドイツの美術館が置かれた環境を分析した点で、より客観的な捉え方を提示できている。今後、同書の著者と協力し、国際シンポジウム等で議論を深めることも可能だろう。

(2) 日本美術研究者ゼッケルの調査では、自伝 (*Dietrich Seckel, Mein Weg zur Kunst Ostasiens*, 1981) に負うところが多かったが、彼がドイツで日本美術研究を開始する前に権威となっていたキュンメルおよびその弟子たちとの関係について分析した点、また彼の日本滞在時における美術史研究や、人的ネットワークについて精査した点において、独自性を示すことができた。ゼッケルが回顧したように、戦後西ドイツで日本美術研究を行おうとしても専門書など全くない状況であった。しかし、各地で復興に携わっていたキュンメルの弟子やキュンメル本人の協力を得て、ゼッケルはハイデルベルク大にアカデミックな場を創出することに成功し、その繁栄は現在まで続いている。今後はハイデルベルクの研究者と共同プロジェクトのかたちで、ゼッケルについて、より多角的な視点で分析できるよう努めていきたい。

(3) キュンメルが築き上げたベルリンの東アジア美術コレクションは、専用の展示室も

含め、多大な戦争被害を受けた。わずかに西ドイツに残った作品群は、1950年夏にドイツ北部の都市ツェレで展示公開された。この展覧会「東アジア絵画の一千年 Ein Jahrtausend Ostasiatischer Malerei」(図1)は、キュンメルが関わった最後の仕事となった。翌年ベルリンでも同内容の展覧会が開催され、展示環境や専門の人員が十分でない状況でも日本美術の鑑賞の場が創出されていたことがわかる。こうした活動については、展覧会の図録に加えて、西ドイツ国立美術館の年報等でも確認できるが、一方で東ドイツ側の活動については不明な点が多く、引き続き資料調査を行っていく必要がある。また当初はベルリンのアジア美術館において現地調査を予定していたが、先方がフンボルト・フォーラムへの移設にあたり休館期間となったため、調査は叶わなかった。しかし、図録等の原資料を手に入れたほか、日本国内のアーカイヴにも多くの関連資料があると判明し調査を進めることができた。



図1 図録表紙
Ein Jahrtausend Ostasiatischer Malerei, 1950

なお研究成果(1)、(2)および(3)について、2017年9月に開催された国際会議 Tsukuba Global Science Week において口頭発表を行った。また発表内容は Proceedings として同会議のホームページに掲載された。

(4) 2018年春に日本美術史研究者の Eugenia Bogdanova 氏から提案があり、戦後の日米美術交流に寄与した芸術家長谷川三郎に関するパネル発表に参加することとした。筆者は長谷川三郎とドイツ人芸術家ハンス・リヒターの米国における交流について、2010年に論文「長谷川三郎とハンス・リヒターの親交 - ニューヨークの出会いから「日米抽象美術展」へ」(『近代画説』19)として発表した。追加調査を行いあらためて二人の交流を多角的な視点で捉え直すこととした。なぜなら、この事象は本研究課題に深く関わるからである。

長谷川とリヒターは戦前より熱心に抽象芸術へ取り組み、抽象表現と日本文化に共通点を見出すなど、ともに通底する価値観を築き上げていたにも関わらず、1954年まで知り合

う機会を得ることはなかった。しかもその出会いは両者が青年期を過ごしたヨーロッパではなく、米国ニューヨークであった。このことは、日本とドイツの敗戦および日独美術交流の断絶を象徴するものである。実際、本パネル発表のチェアを務めた Prof. Mark Johnson 氏からも指摘があったように、日米関係を基盤とした日独美術交流の事例は、長谷川とリヒター以外にも挙げることができる。

資料収集のため、ニューヨーク近代美術館を中心に米国での調査を行い、また神戸の甲南学園長谷川三郎記念ギャラリーでも調査を行った。

調査結果をまとめ、2018年3月にワシントン D.C. で開催された米国アジア学会年次大会 Association for Asian Studies, Annual Conference 2018 において、パネル「Networks of Modern Japanese Art: Personal Dimensions」に参加し「Hasegawa Saburō and Hand Richter: Friendship of Abstract Artists」と題して口頭発表を行った。ふたりの交友は、東京国立近代美術館での日米抽象美術展におけるリヒター作品の展示(図2)として結実したことを示し、オーディエンスからのフィードバックも得ることができた。

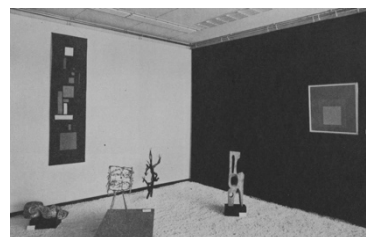


図2 展示風景 日米抽象美術展, 1955

総じて、第二次大戦終戦時までに築かれてきた日独美術交流のネットワークおよび資源が断絶・破壊された状態から、ドイツでは個人および組織の働きによって徐々に日本美術研究が復興していったことを明らかにした。一方で、米国へ拠点を移したドイツ人芸術家たちは図らずも同地で日本の美術界と接点を持つこととなったが、このことは、当時、日独間における芸術家同士の交流の場がドイツには未だ形成されていなかった状況を示している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計2件)

- ① Minami Eguchi, Hasegawa Saburō and Hand Richter: Friendship of Abstract Artists, Association for Asian Studies Annual Conference, March 24 2018, Washington D.C (USA).
- ② Minami Eguchi, The “Stunde Null (Zero

Hour)” for Japanese Art History in Germany, Tsukuba Global Science Week 2017 Art&Design Session, September 26 2017, つくば国際会議場(茨城県つくば市).

[その他]

ホームページ等

- ① Proceedings: Minami Eguchi, The “Stunde Null (Zero Hour)” for Japanese Art History in Germany, Tsukuba Global Science Week 2017 Art&Design Session
(http://www.kokuren.tsukuba.ac.jp/TG-SW2017/program/images/8-17/0907_ART%20&%20Design%20Session_2017revised.pdf)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

江口 みなみ (EGUCHI, Minami)

筑波大学・芸術系・研究員

研究者番号：90753210